

ばんけい

教育ほつとにゅーす
かわら版こ みち
教育の小径No.76
2月号
2015 February

今月のつとば

か ちゅう くの ひろ
火中の栗を拾う

自分の利益にはならないにもかかわらず、他人のために危険をおかすことです。猿におだてられた猫が囲炉裏の中の栗を拾うという寓話にもとづいています。



国士舘大学教授
北 俊夫先生

ボトムアップで学校評価を

- 学校評価の実施は学校教育法で義務づけられています。学校評価の結果は、保護者などに公表するとともに、次年度の教育課程の編成に生かします。
- 学校評価の実施に当たっては、校内に一人一人の教職員の役割を明確にした組織や仕組みを立ち上げ、全校体制で取り組みます。

今月の記念日

世界友情の日(2月22日)

ボーイスカウト・ガールスカウト運動の創始者である、イギリスのバーデン・パウエル卿夫妻の誕生日にちなんで、1963年にボーイスカウト世界会議で制定されました。

学校評価の目的は何か

この時期になると、各学校では学校評価のとりまとめが行われます。学校評価は、学校教育法にもとづいて実施されるものです。第42条に「小学校の教育活動その他の学校運営の状況について評価を行い、その結果に基づき学校運営の改善を図る」と規定されています。これは学校による自己評価です。評価の結果は、学校教育法施行規則(第66条)によって公表が義務づけられています。

同法の施行規則(第67条)には、当該学校の保護者や地域住民など当該の学校関係者による評価(学校関係者評価)について規定し、結果については保護者や地域住民に「公表するよう努めるもの」としています。

学校評価は、年度初めに設定した教育目標や指導の重点、それらを実現させるための具体的な取り組みについて、学校が自己評価するとともに、学校外の関係者からも評価を受けるものです。

学校評価の目的は、当該学校の教師自身がこれまでの教育活動の成果と課題を確認するとともに、今後の改善策も含めて、評価の結果を広く保護者や地域住民に公表することにあります。これは各学校が説明責任を果たすこと

であり、同時に結果責任を負っていることを意味しています。

いかなる取り組みにおいても、PDCAサイクルが重視されます。学校評価においても例外ではありません。Pは教育課程の編成、教育計画の作成、Dは教育活動の実施・展開、Cは教育活動の現状と成果と課題の把握、すなわち点検・評価することです。そしてAは成果と課題にもとづいて改善策を整理し、次年度の教育課程編成のために活用することです。学校評価はPDCAサイクルに位置づけて実施されます。

学校評価は、その成果や課題をもとに改善策を検討し、次年度の教育課程の編成や教育活動の計画に生かすことが重要です。学校評価をとおして教育活動の改善策を見だし、学校の教育水準のさらなる向上を目指すところに主要な目的があります。

大切な教師一人一人の問題意識

学校評価は、管理職や教務主任などが考えるもの、実施するものと受けとめられがちですが、そうではありません。学校評価を実施するとき何より重要なことは、全校体制で取り組むことです。

校内で共通理解を図り、共通実践するためには、学校評価の全体像や実施

の流れを示したイメージ図(フローチャート)があるとよいでしょう。全教職員が自分のこととして受けとめるためには、校内に学校評価のための組織やチームを立ち上げ、一人一人の役割分担を明確にすることも大切です。

学級担任として学校評価に参画するときには、日々接している子どもたちがどのように成長してきたか。指導上のような課題に遭遇しているか。課題の解決のためにどのような工夫や努力をしてきたかなど、子どもや指導に根づいた評価を行います。4月当初に作成した学級経営案に立ち返って、評価・反省するとよいでしょう。

学校としての指導方針や重点事項がどの程度実現しているのか、学年会などで具体的に話し合います。印象や批評ではなく、具体的な事実にもとづいて成果と課題を確認したいものです。

学級担任の立場から学校評価するときには、常に子どもの生活や学習の姿に目をやり、子どもに密着した学校評価を進めます。日々の実践と乖離した学校評価にならないようにします。子どもたちの個別具体的な実態をもとに、学校としての評価を総合的に行うことがボトムアップの視点を重視した学校評価です。

学校評価には、教職員一人一人が当事者意識をもち、確かな問題意識のもとに取り組みたいものです。

「おふる」の話

いまや死語になりつつある言葉のひとつに「おふる」があります。おふるとは漢字で「御古」と書きます。目上の人を使いふるした物や他人がすでに使った物を言います。

「おふる」と聞いて思い浮かべるものに教科書があります。教科書がいまのように無償で給与されるまでは、各家庭が教科書を購入していました。兄弟や姉妹がいる家庭では、少しでも負担を減らすため、兄や姉が使った教科書を弟や妹が譲り受けていました。

兄や姉は、翌年以降に弟や妹に譲ることを見越して、教科書の表紙を厚めの紙でカバーをして使っていました。教科書に文字などを書いたり、紙を折り曲げたりすることは決してしませんでした。まして放り投げることは厳禁でした。1年間大切に使い、弟や妹に譲っていました。教科書の内容が変わると、それができなくなることもありました。

おふるには、教科書のほかに、衣類や靴、三輪車や自転車、遊び道具などさまざまなものがありました。おふるを使うことが当たり前のことでした。

こうした経験をとおして、物を大切にすること、最後まで使いこなすことが日常生活のなかで身をもって躰けられていたのです。こうした風景は、物の豊富な現代社会ではほとんど見られなくなりました。「もったいない」という言葉の意味を改めて指導する必要があります。

1年生向けの道徳の教材に「あおいじてんしゃ」（赤堀美善夫作、文溪堂）がありました。ここでは、お兄さんから譲り受けた自転車を捨てずに、乗りつづけようとするあきら君の心境と行動が語られています。

朝食と学力の関係

文部科学省から平成26年度の「学力調査」の結果と生活習慣等に関する調査をクロスした結果が公表されています。そのなかに、食育に関する興味深い結果が見られます。それは朝食の摂取状況と国語・算数の学力調査の成績との相関関係です。

国語の基礎を問うA問題の場合、朝食を毎日食べている子ども(6年生)は、成績が74.3点だったのに対して、まったく食べていない子どもは、57.3点でした。B問題では、同じく56.9点に対して、38.9点でした。算数のA問題とB問題についても同様な傾向が見られました。

これまでも、国語や算数の学力の高い子どもは、朝食を毎日しっかり食べていることが言われてきましたが、このことが今回の調査結果からも立証されたこととなります。

このようなデータは、保護者会やPTA活動などの場で保護者に説明する際に、また子どもたちには学級活動の時間に活用することができます。「早寝 早起き 朝ごはん」運動が提唱されて久しいですが、朝ごはんを毎日食べることは、健康を維持し体力を向上させるためだけではありません。学力を高めるためにも大切なことです。

ただ、朝食をしっかりと食べれば、学力が高まるということではありません。逆は必ずしも真ではありません。このことはしっかりと伝える必要があります。

コラム

ものの見方・考え方は何か(4)

「狙い」は何か

新聞やテレビなどでニュースを読んだり聴いたりしていると、政治など世の中の動きを事実として紹介するだけでなく、特に新しいことが始まるような場合には「このことには、～～に狙いがあります」「～～することを狙っています」といった解説をたびたび耳にします。目に見える現象と背景にある意図や狙いを一体にとらえることによって、現象の本質が見えるようになるからでしょう。

現象のみを追い求めると、本質を見失うことがあります。いま学校では、子どもの言語活動を充実させる取り組みが行われています。ところが、どうして言語活動の充実が期待されているのかが十分に確認されていない状況が見られます。そのために手段であるはずの言語活動が目的化され、言語活動のための授業が展開されています。これでは本末転倒です。

子どもの習熟の状況に応じて小集団を編成して指導する習熟度別学習が盛んに行われたころにも、学力の向上を目指すという目的が曖昧になり、初めに習熟度別学習ありきの取り組みがみられました。

新しい動きが提起されたとき、それはなぜ必要なのか。何を狙っているのかを考えることは誤らない対応をするうえで重要です。狙いを確認することによって事象の本質を理解することができ、その結果、多様な実践を工夫することができるようになります。目指すべき方向が明確になるからです。

私たちがものを見たり考えたりするとき、狙いは何かを確認することは重要な視点だと言えます。

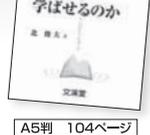
INFORMATION

こんなときどうする!
学級担任の危機対応マニュアル

◎著者 北 俊夫
◎定価 950円+税
◎発行 株式会社文溪堂
A5判 96ページ



なぜ子どもに社会科を学ばせるのか



A5判 104ページ

言語活動は授業をどう変えるか
—考え方と実践のヒント—



A5判 112ページ

「教育の小径」の全てのバックナンバーをインターネットでお読みいただけます!

ダウンロードして印刷も可能です。お知り合いの先生にもぜひお勧めください。

<http://www.bunkei.co.jp/komicchi.html> または「ぶんけい 教育の小径」で検索。



企画・編集：ぶんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2015年2月1日